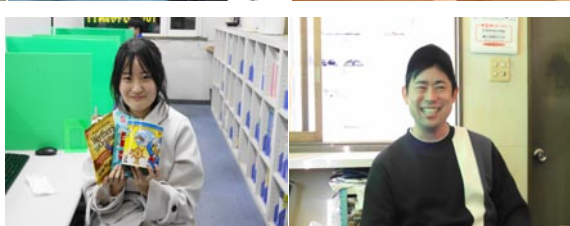




11月の学習のようすです。



差し入れありがとうございました。



33期生で厚岸翔洋高校の海洋資源科(調理)の2年生の成田すみれさんが修学旅行のお土産を持ってきてくれました!  
11/21 12期生で湖陵高校から国士舘大学の増田真也君が20年ぶりに顔を覗かれました。12月、入籍するので相手の親に挨拶に!

**本書に日本に必要を教育とは何か?**  
文科省の改革は「うわべ」だけ  
今回の学習指導要領改定でも「柔軟性」や「裁量拡大」という言葉は並ぶが、根本の構造は変わっていない。世間一般の勉強の目的が、「より高い偏差値の高校や大学に入学すること」に置かれているからだ。学校も保護者も受験産業も、その枠組みに依存しているため、抜本的な変革は実現しないだろう。結果として、自分の能力に自信があり挑戦的な子どもたちは、高校を出るとアメリカなど海外の大学に進学する傾向が出ている。この流れは年々強まっていると聞いている。

**自分を知り個々の学びを尊重する教育へ**  
これからの教育に必要なのは「個々の学びを尊重する」仕組みと、それを認める風土だろう。子どもが小中学校の段階で「自分は将来、何がやりたいのか」、「自分は何か得意で、何が不得意なのか」、つまり自分自身をある程度知り、その上で自分に合った高校、大学、専門学校に進むことを選べる社会が必要だ。

日本には真面目で勤勉な子どもが多い。個人の意見だが、今の教育システムでは、未来を切り開く力は育たないと思う。子どもながらも、もっと自分自身を知り、創造力豊かな考える力を身に付けてほしい。そのためには、授業時間の削減以上に、授業の在り方、内容を転換する必要がある。

もっと自由に自ら作り出す時間を増やしてほしい。極端に言えば、小学校では読み書きソロバン、さらに道徳を含めた常識、良識の学習が出来ればよい。あとは遊び、読書、多くの人の対話を通して広く社会性を身に付ける。確かに、これを決心、実行することは難しいし危険だ。

**高校・大学改革と受験制度**  
最も重要な課題は、小中学校の根本的改革、そして高校と大学の受験制度の見直しだろう。現在の大学入試は多少の改革はあるが、依然として「知識の量」を測ることが中心になっている。だが世界のトップ大学では、論理的思考力、表現力、リーダーシップ、そして社会的貢献への姿勢が重視されている。

日本でも、推薦入試や総合型選抜が広がっているが、多くの場合、生徒の「青田買い」にすぎない。一般入試中心の構造は変わっていない。高校入試についても同様だ。偏差値に基づく序列が中心となっている。

高校、大学の受験制度を根本から変えなければ、日本の教育改革はうわべだけで終わるだろう。具体的には大学入学には、大学教育に必要な基礎知識を明示し、それをクリアすれば本人のやる気を重視し、論文、面接、課外活動を評価する仕組みに転換すればいい。これにより受験勉強は軽減され、自分の興味、得意を生かした進路選択が可能になる。

**本当に必要な教育とは何か**  
では、「本当に日本に必要な教育」とは何か。それは多様性を前提に、子ども一人ひとりの可能性を最大限に伸ばす教育だろう。小学校や中学校の時期

に大切なのは、自分の性格や得意・不得意を理解し「自分を知る」ことだ。教師はその手助けをし、子どもが自らの特性を見つめられるようにする必要がある。

その上で、高校や大学は偏差値やランキングではなく、自分の意思で将来を考え、選択する場所であるべきだ。専門学校であっても構わない。重要なのは、それが自分の将来につながる選択であるということだ。こうした教育が実現すれば、早期退学や企業での退職も減るだろう。

人間にはそれぞれ異なる才能がある。勉強やスポーツ、音楽や芸術といった目立つ分野だけでなく、優しさ、忍耐力、細やかな気配り、共感力なども立派な才能であり、生きる力だ。しかし現在の日本の教育は、その多様な才能に十分な目を向けていない。知識を詰め込むだけの学習では、子どもは自分の本当の力を発見できず、不登校や大学・企業からの早期離脱につながる。子どもたちが「行きたくない学校」「学びたいと思える場」を整えることが重要だ。今こそ「教育の再構成」が必要だ。知識の量を競うのではなく、自分の得意・不得意を理解し、それに基づいて進路を選ぶ教育へと変えていくべきだ。小中学校の段階で自分と向き合う経験を持たせ、その後の高校・大学・職業選択も自分に合ったものになるだろう。「真の教育」とは、子ども一人ひとりの中に眠る才能を見つけ出し、共に育むことだ。発想力や創造性は単なる知識の積み重ねではなく、多様な経験や個性、感性、広い視野の結びつきによって初めて生まれる。

なぜ日本ではステイティブ・ジョブズやジェフ・ベゾス、マーク・ザッカーバークのような人物が生まれなかったのか。その答えは教育にある。才能を見つけ、伸ばす教育こそが未来の日本に必要なと確信している。ノーベル賞は取れても、社会実装の発想は心もとない。

この実現には、文部科学省の制度改革だけでなく、学校、保護者、そして社会全体の意識改革が欠かせない。教育は国家百年の計であり、未来の日本をつくる基盤だ。文科省の新指導要領は一歩前進ではある。

しかし、本質的な課題は「受験制度」と「画一的な価値観」にある。これを改めない限り、日本の教育改革は形だけで終わってしまうだろう。

**作家 高嶋哲夫**  
不登校が35万人を超え、校内暴力も過去最多です。そして学力低下、また教員不足と日本の公教育は崩壊状態にあると言えます。作家の高嶋氏の言っているように文科省の改革は「うわべ」だけで、先生たちにとって子どもたちにとっても大変な状況になっています。しいては世界から30年遅れていると言われているように国の問題でもあります。

在籍する生徒の所属校																																						
小学校	中学校	高等学校	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1					
青野・富原	青陵・美原	江南	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月					
●冬期講座(中1～3)			●冬期講座(中1～3)			●冬期講座(中1～3)			●冬期講座(中1～3)			●冬期講座(中3)			●冬期講座(中3)			●中3関数特講②			★春中1年定期(～11)			●中3計算特講			●中3計算特講			●中3計算特講			●中3計算特講					
年末年始休み(～3)			●冬期講座(中2～3)			●冬期講座(中1～3)			●冬期講座(中1～3)			●冬期講座(中1～3)			●冬期講座(中3)			●冬期講座(中3)			●中3関数特講②			★春中1年定期(～11)			●中3計算特講			●中3計算特講			●中3計算特講					
インフル猛威、感染者過最多に！																																						
過保護・過干渉は子供をダメに！																																						
																																						
高校入試まで93日！																																						
12月の予定																																						

**AI・気候変動・国際化・高齢化・価値観の多様化が同時進行する時代を子どもたちは生きていかなければなりません。画一的で柔軟性のない教育内容ではそんな時代に対応することは出来ません。**

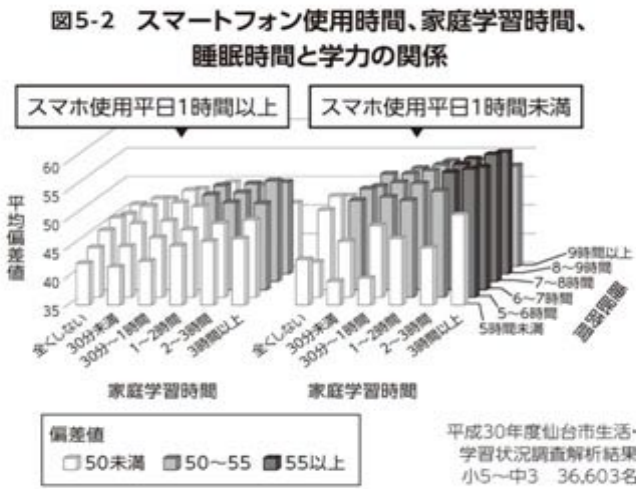
自分で考える力、人と協力する力、失敗を恐れずに「挑戦する勇氣」、自分の感情の扱い方を知る能力が必要なのです。これらの力の元になるのが問題となつていく読解力と基礎学力の低さです。AI時代だからこそ、文章を理解し、自分で構造をつかむ力が重要になります。

さらに大事なことは自分の好きなこと・得意なこと、個性を生かすことに向かっていることです。キーワードは多様な価値観です!



スマホと子どもの脳の深刻な関係  
『学力が大きく低下する』驚きの結果  
(11号の続き)

スマートフォン自体が学力を大きく低下させている



どうして、スマホ・タブレットを1時間以上使うと、学習効果が得にくくなってしまうのか。私たちが考えた仮説の一つはこうです。スマホ・タブレットの長時間使用は、間接的に子どもの睡眠時間を短くして、結果的に睡眠不足によって学力の伸び悩みが生じるのではないか。つまり、スマホ・タブレットの間接的な影響を疑ったのです。

文部科学省のデータなどから、睡眠時間の短い子どもは学力が低いという傾向があるとわかっています。そのことを踏まえて、改めて睡眠時間を加味した解析をしました(図5-2)。

この図を説明しますと、左側のグラフはスマホ・タブレットの端末使用時間が「1時間以上」の群で、右側が「1時間未満」の群です。横軸は、家庭での学習時間を6つに分けた群が並びます。そして、奥行きは睡眠時間の長さで分けた群です。1時間刻みで分けていて、一番手前が「5時間未満」、その次から「5～6時間」「6～7時間」「7～8時間」「8～9時間」「9時間以上」となっています

家庭学習時間の6群と睡眠時間の6群の掛け合わせになるので、合計36群に分かれます。棒グラフの高さは、先のグラフと同じく、学力テストの偏差値の数値を示しています。高いほど成績が良いことになります。

では、まず左側のスマートフォンなどの使用時間が毎日「1時間以上」の子どもたちから見ていきましょう。全体の傾向として右肩上がりではありますが、その度合いがあまり大きくありません。また、奥行き方向を見ると、手前になるほど低くなっています。

偏差値50、つまり平均点を超えている群はどこにいますでしょうか。1時間以上の家庭学習をしていて、睡眠時間が6～9時間の子どもたちだということがわかります。つまり、この36群の棒グラフは、勉強時間が長いほど成績は良く、睡眠時間が短いほど成績は低いことを示しています。

ただ、一番奥の列を見ると、学力が少し下がっていることがわかります。睡眠時間が極端に長い子どもたちは学力が低くなっています。この傾向は以前から文科省のデータなどで指摘されているところです。一つの推測は、子どもの睡眠の質が悪い環境があって、長時間睡眠をとらないと身体がもたないというものです。

では、スマートフォンなどの端末の使用が「1時間未満」の子どもたちを見ていきましょう(グラフ右側)。大づかみで言うと、全く勉強をしない子どもたちと、睡眠時間が5時間未満の子どもたちを除いて、ほとんどの子どもたちが平均点を超えています。この解析結果には、正直、驚かすにはいられませんでした。

私たちは、この結果の因果関係を知るために、「パス解析」という手法を用いました。私たちが想定した経路(パス)は3つです。

①スマホ・タブレットを使うことによって学習時間が減って学力が低くなる

②スマホ・タブレットを使うことによって睡眠時間が減って学力が低くなる

③スマホ・タブレットを使ったことによって直接的に学力が低くなる

この3つの経路について調べたところ、統計的に一番影響が強く出た経路

は③のスマホ・タブレットなどの使用そのものによる直接的な経路でした。この解析結果を見て、私たちはさらに驚きました。睡眠時間や学習時間とスマホ・タブレットの間には直接的な関係がなく、**スマホ・タブレットを使うこと自体が学力を大きく低下させていたという関係が見えてきたのです。**

これは相関関係ではなく因果関係

このようなデータ(一種の疫学データ)を解析するときの注意点は、相関関係と因果関係を混同しないことです。この場合では、およそ3万6000人の子どもたちに対して、ある時点のデータを預かって解析しているので、睡眠時間や学習時間、スマホ・タブレットの使用時間などの関係は明らかにできますが、因果関係については何も明らかにすることはできません。

例えば、先に示した解析の場合では、スマホ・タブレットを使うことと子どもの学力には相関関係があることがわかります。しかし、これだけでは、「スマホ・タブレットを使ったから学力が下がった」とは言えず、もしかしたら、もともと学力が低い子どもたちは、生活習慣という環境、あるいはもって生まれた性質によってスマホ・タブレットが大好きなのかもしれません。わかりやすく言うと、卵が先かニワトリが先かという話であり、この種のデータではどちらが先かを決めることができません。

そこで、私たちは仙台市から公立小中学校に通う7万人以上の児童生徒の全員に背番号をつけたデータをいただき、別の観点からの解析をしました。この解析では「連結可能匿名化」という手法を用いました。個人を特定することはできないけれど個人の経年変化は特定できるというやり方です。そして、生活習慣の変化と学力の変化についての因果関係が見えてくるように解析しました。

結論から言うと、スマホ・タブレットを長時間使う習慣をもち続けた子どもたちは、学力が低い状態を維持していました。そして、スマホ・タブレットを「1時間未満」で抑えることができていた多くの子どもたちは、学力が高い状態を維持していました。さらに、途中でスマホ・タブレットをあまり使っていなかった状態からヘビーに使い始めた子どもたちは、その翌年から極端に学力が下がっていたことも確認できました。

逆に、スマホ・タブレットをヘビーに使っていたけれど、生活習慣を少し改めて利用時間が短くなった子どもたちは、翌年から学力が上がり出すという傾向が観察できました。ちょうどこの間に、仙台市は子どもたちにリーフレットを配布し、スマホ・タブレットと学力の関係を示しながら、その使用を控えたほうが良いと警告していました。そのメッセージを受け取って生活習慣を改める子どもたちが少なからずいたのです。

このような調査方法であれば、因果関係を明らかにできます。端的に言えば、スマホ・タブレットの使用が卵なのです。

PHP online 2025年10月07日

そして読解力について

全国学力テストの結果でも指摘されている**読解力の低下**については「**社会で求められている国語力**」と「**学校現場で教えられている国語力**」がうまく噛み合っていないと。

『AI vs 教科書の読めない子どもたち』は、AI研究者である新井紀子氏が開発した、読解力を測定するテスト「**リーディングスキルテスト(RST)**」の結果から、現在の学生は基礎的な文章読解力がきわめて低いことがわかると。RSTは、文や文の短い連なりを正確に読むことができるかを科学的に診断するテストである。このテストを一躍有名にしたのが、次の問題だ。皆さんは正解できますか。

中学生正答率38%の「アレクサンドラ構文」 「アミラーゼ構文の正答率16.3%」

“アレクサンドラ構文”

Alexは男性にも女性にも使われる名前で、女性の名Alexandraの愛称であるが、男性の名Alexanderの愛称でもある。

この文脈において、以下の文中の空欄に当てはまる最も適当なものを1～4の中から選びなさい。

Alexandraの愛称は( )である。

①Alex ②Alexander ③男性 ④女性

リーディングスキルテストから

“アミラーゼ構文”

アミラーゼという酵素はグルコースがつながってできたデンプンを分解するが、同じグルコースからできていても、形が違うセルロースは分解できない。

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢から1つ選びなさい

セルロースは( )と形が違う。

①デンプン ②アミラーゼ ③グルコース ④酵素

リーディングスキルテストから

こういう問題が解けないのを「**機能的非識字**」と言うそうです。

知的障害もないため、文を読めてない事を自覚をしませんし、不便にも感じていないということです。でも、実際には文章を読めていないのです！